

学位論文審査報告書

氏 名 : 上枝いづみ
報告番号 : 甲 190 号
学位の種類 : 博士 (文学)
論文題目 : ガンダーラにおける仏伝図の研究

I. 前言

上枝いづみ氏が提出した学位請求論文『ガンダーラにおける仏伝図の研究』(A4版 388 ページ、図版 55 ページ、図・表の付録 35 ページ)は、ガンダーラの仏伝美術に特徴的な「釈迦の生涯」を連続的に表す図像について、その図像全体の様相を考察し、その中でもとくに「誕生」と「競試武芸」に関わる図像に焦点をあてて〈図像の伝承〉および〈仏伝文献との関連〉という二つの視点から詳細に分析し、ガンダーラ仏伝美術の特徴を解明することをめざした労作である。

本論文の内容を目次によって示すと、以下のとおりである。

序論

- 第一節 ガンダーラにおける仏伝図制作の重要性
- 第二節 ガンダーラの仏伝図の配列と場面選択
- 第三節 ガンダーラの仏伝表現の特質
- 第四節 ガンダーラの仏伝図と仏伝文献
- 第五節 本論の目的と研究方法

第一部 ガンダーラ仏教寺院における仏伝図の配列に関する諸問題

第一章 主塔円胴部を飾った一代記的仏伝表現

—サイドゥ・シャリフ I 主塔円胴部の仏伝図浮彫の検討—

はじめに

- 第一節 主塔円胴部周囲の仏伝図浮彫の検討
- 第二節 浮彫の年代と表現

結びにかえて

第二章 小塔円胴部を飾った一代記的仏伝表現

はじめに

- 第一節 小塔円胴部周囲の仏伝図浮彫の検討
- 結び

第二部 ガンダーラ仏伝図における誕生場面の形成に関する諸問題

序章

- 第一節 ガンダーラにおける「誕生」の表現
- 第二節 誕生伝説の背景に関する先行研究
- 第三節 本研究における目的および使用する仏伝文献

第一章 「誕生」図の諸問題

はじめに

- 第一節 「誕生」図、「誕生・七歩」図の表現
- 第二節 文献に現れた「誕生」図の図像的特徴

結び

第二章 「灌水」図の諸問題

はじめに

- 第一節 「灌水」図の表現
- 第二節 文献にみる「灌水」図の図像的特徴

結び

結語

第三部 ガンダーラ仏伝図における競試武芸図形成に関する諸問題

序章 ガンダーラの競試武芸図とその背景

はじめに

- 第一節 ガンダーラの競試武芸図概観
- 第二節 文献にあらわれた競試武芸図の図像的特徴

結びにかえて

第一章 レスリング図の諸問題

はじめに

- 第一節 「レスリング」の説話概観
- 第二節 「レスリング」図の表現—競技者の図像の二つのタイプ—
- 第三節 スワート地方出土の作例
- 第四節 ディール地方出土の作例
- 第五節 ガンダーラ盆地出土の「レスリング」図像

結び

第二章 「擲象」図の諸問題

はじめに

- 第一節 「擲象」図と仏伝表現系統
- 第二節 ガンダーラの「擲象」図の表現
- 第三節 文献資料に記された「擲象」図の図像的特徴

第四節 『大唐西域記』の伝える「擲象」説話と象坑

結び

結語

結論

引用・参考文献

図版一覧

付 録

- ・ 地図
- ・ 付表：誕生に関連する仏教文献の記述一覧
- ・ 作例一覧

II 論文の要旨

序論

ここでは、ガンダーラの仏伝美術研究の古典ともいべき A.フーシェの業績（1905~51年）とその後の研究史を概観し、さらに近年の研究動向を踏まえて本論文の着眼点を述べ、論文全体の構成を説明している。先ず、ほとんどが断片的に出土する仏伝浮彫の中で、とくにセットとしてストゥーパを装飾していた作例があることに注目し、こうした仏伝浮彫の内容が全体としてどのようなものか、その配列と場面選択について概観する。そして、紀元1~3世紀頃に隆盛したガンダーラの仏伝美術が「教化・神変説話表現」の系統と、「一代記的仏伝表現」の系統の二系統に分けられることから、仏伝文献の系統についても概観し、とくに後者の「一代記的仏伝表現」にガンダーラの仏伝美術の大きな特質があることを指摘する。本論文の目的は、この「一代記的仏伝表現」の具体的な様相を解明すること、その中でも「誕生」と「競試武芸」の諸場面を重点的に分析して、ガンダーラの仏伝美術の特徴を明らかにすることにあるという。

第一部 ガンダーラ仏教寺院における仏伝図の配列に関する諸問題

ここでは、セットとして残る仏伝浮彫の作例に注目し、その様相を検討している。

第一章で、イタリア隊によって発掘されたガンダーラ北部のスワートのサイドゥ・シャリフ I 主塔を取り上げ、発掘責任者である D.ファッチェナンの発掘報告書や論文を詳しく紹介して検討を加える。サイドゥ・シャリフ I 主塔の仏伝浮彫は断片的なものしか残っていないが、当初は 65 ほどの場面が連続して配

置されていたと推測される。場面の配置は、釈迦の生涯に沿って、「誕生サイクル」、「宮廷生活サイクル」、「求道サイクル」と続くが、次の「教化サイクル」の場面はきわめて少なく、その後は最後の「涅槃サイクル」に直結していたことを明確にする。このサイドウ・シャリフ I 主塔の仏伝浮彫は、紀元 1 世紀半ばから後半の制作と推定され、ガンダーラ地方の最初期の仏伝図とみなしてよい。この時代にすでに「一代記的仏伝表現」が成立していることは、仏教のさまざまな次元において重要な意味をもつという。

第二章では、ガンダーラ仏寺に献納された小塔の胴部を飾っていた、連続する仏伝浮彫の作例を 10 例挙げ、写真資料に依拠して各場面を検討し、サイドウ・シャリフ I 主塔の仏伝浮彫と比較考察する。小塔浮彫では、釈迦の成道以前の「誕生」「競試武芸」「宮廷生活」「出家」などの多数の場面が続き、成道以後の教化場面は僅かしかなく、すぐに「涅槃」（「荼毘」「分舍利」などを含む）の場面が続いていること、全体では釈迦の生涯を 50 ほどの場面で連続的に表していることを明らかにし、小塔浮彫とサイドウ・シャリフ I 主塔浮彫では、全体の場面配列に共通性がみられるという。一方、小塔浮彫では「燃燈仏授記」を仏伝の起点とすることが多いのに対し、サイドウ・シャリフ I 主塔浮彫では「託胎霊夢」を起点とし、「燃燈仏授記」はみられないことを指摘する。小塔の仏伝浮彫の方が時代的に遅く、その間に仏陀観の新たな展開があったのではないかと推測している。

第二部 ガンダーラ仏伝図における誕生場面の形成に関する諸問題

序論で、第二部の目的を説明する。第二部の目的は、「誕生」「灌水」の場面を中心に、先行研究に依拠してギリシャ・ローマ美術の受容の様相を考察するとともに、インド的な文化土壌にも注目してガンダーラ以前のインド古代初期仏教美術（パールフット、サーンチーなど）の図像伝統を継承していることを具体的に明らかにすること、さらに、図像をパーリ、梵本、漢訳の諸経典の記述と比較検討して、図像を解釈することにあるという。

第一章では、ガンダーラの「誕生」（「七歩」を含む）の場面を取り上げ、〈図像の伝承〉および〈経典との照合〉という二つの視点から、図像について詳細に検討している。ガンダーラの「誕生」場面は、摩耶夫人が樹の枝を右手でつかみ、立ったまま右脇から釈迦が生まれ、帝釈天が太子（釈迦）を受け取る図像に特徴がある。この図像のイメージ・ソースを、ギリシャ神話の「ゼウスの腿からディオニュソスが生まれ、ヘルメスが赤子のディオニュソスを受け取る」図像に求めた M.シュトイエ説を紹介するが、この「誕生」の図像はギリシャ神話だけでは説明できないとして、インドの古代初期美術の樹下女神ヤクシーの

姿の伝統と、「右脇出胎」の経典上の伝承を強調する。また、「誕生」の場面にみられる指笛を吹く男性を「驚嘆」や「讚嘆」を表す身振りと解釈して、これもまたインド古代初期美術以来の図像を継承したものであることを指摘する。

このように図像の細部に注目して、その図像の伝統・伝承を検証するとともに、仏伝文献を幅広く検討して、ガンダーラの仏伝美術がどのような経典と近い関係にあるかを考察する。すなわち、摩耶夫人の右脇からの出胎については、南伝経典には説かれず、梵本・漢訳の北伝経典にみられること、さらに帝釈天が太子を受け取ることについても、梵本（『ラリタヴィスタラ』）、漢訳（『修行本起経』『仏本行集経』『方广大莊嚴経』『根本説一切有部毘奈耶雜事』）の限られた北伝経典にみられることを指摘する。また、摩耶夫人を支える女性は、摩耶夫人の妹マハープラジャーパティータとするのが通説だが、文献上にはその言及はなく、天女である可能性があることを論じている。結びでは、ガンダーラの「誕生」の場面は、「右脇出胎」という神話的な内容を視覚的に明示し、天人たちに囲まれた奇瑞に満ちた表現をとって、超人化された存在としての釈迦を表しており、『ラリタヴィスタラ』や『マハーヴァストゥ』の大乗的な仏陀観とも呼応すると推定している。

第二章では、「灌水」の場面を取り上げる。ガンダーラの「灌水」場面は、三脚台の上に立つ赤子の釈尊を二人の女性が支え、梵天と帝釈天が両側から右手で水瓶を執って水を灌ぐ図像を基本とし、それ以外には龍王が灌水する図像が僅か2例あるのみという。先行研究では、三脚台に立つ裸形の男児の図像はローマ時代の浮彫に類例があるとするが、古代インドの灌頂儀礼と関係する可能性があることを指摘している。インドの「灌水」場面では二龍灌水が一般的であるのに対し、ガンダーラでは梵天・帝釈天が灌水する点に大きな特徴があり、『ラリタヴィスタラ』『普曜経』『方广大莊嚴経』の記述と深く関わっていることを明らかにしている。

第三部 ガンダーラ仏伝図における競試武芸図形成に関する諸問題

序論では、ガンダーラの仏伝図の顕著な特徴であった釈迦の宮廷生活に関わる太子時代の説話場面、とりわけ多彩な「競試武芸」の表現を検討している。

インドではガンダーラの仏伝図にのみさまざまな種類の「競試武芸」の図像が確認されることに着目し、「弓技」「レスリング」「剣技」「綱引(?)」「擲象」などの図像を詳細に分析し、さらに多岐にわたる仏伝文献の記述と照合している。また、仏伝の競試武芸と類似するものとして、クリシュナ神話にも着目する。とくに『ハリヴァンシャ』や『バーガヴァタ・プラーナ』にみられるクリシュナ神話の「カンサの誅殺」に、「弓技」「擲象」「レスリング」がみられるこ

とを指摘し、仏伝の競試武芸説話との類似を具体的に明らかにしている。『ハリヴァンシャ』や『バーガヴァタ・プラーナ』の文献の成立は、早くとも4世紀以降とされるが、クシャーン朝のガンダーラとマトゥラーから出土した石板浮彫各1点には、「悪魔ケーシンと戦うクリシュナ」の図像が確認され、クリシュナ神話自体はクシャーン朝時代に形成されたと考えられる。とすれば、クリシュナ神話が釈迦の「競試武芸」の説話や図像の形成に影響を及ぼした可能性がある」と論じている。

第一章では、「レスリング」図について、先ず仏伝經典に依拠して説話を概観し、図像については二人の競技者のうち勝者・敗者の区別が明確である第一タイプと、勝者・敗者が明確でない第二タイプに分けて、その特徴を論じている。第一タイプの「レスリング」図のうち、スワート出土の浮彫には「水を注がれ介抱される敗者の男性像」がみいだせる。M.タッディはこの図像がサイドウ・シャリフIやブトカラI出土の初期の仏伝浮彫にみられること、ローマ時代の浮彫と共通することを指摘しているが、ここでは『太子瑞応本起経』と『修行本起経』の初期漢訳經典にのみ「水を注がれる敗者」の記述がみられることを明らかにしている。一方、第二タイプの「レスリング」は二人の競技者が組み合って、勝者・敗者が明確ではなくなり、作例としてはこのタイプが一般的であると推定する。

第二章では、「擲象」図がガンダーラで初めて表され、それ以降、インドでは確認されないのに対し、中央アジア・中国で造形化されることを指摘し、その図像と表現形式を詳しく分析する。また、梵本と漢訳の11点の經典に「擲象」説話がみられることを明らかにし、それぞれの文献の記述を整理して系統づけ、図像表現との関係を考察する。文献が多いだけにその様相は複雑であるが、『仏本行集経』や『ラリタヴィスタラ』『方广大莊嚴経』と密接に関係しており、このことがガンダーラの仏伝図像の特徴といえることを改めて論じている。

結論

ここでは、本論文をまとめている。ガンダーラの仏伝美術の一つの大きな特徴は「誕生」から「涅槃」までを連続して表す「一代記的仏伝表現」がみられることであり、こうした仏伝表現がどのようにして成立したかを〈図像の伝承〉と〈仏伝經典との関係〉という二つの視点から分析し、とくに「誕生」（「灌水」を含む）と「競試武芸」の説話・図像を中心に検証し、その様相を明らかにした。

〈図像の伝承〉の視点からは、先行研究に依拠してギリシャ・ローマの図像がどのように受容されているかを具体的に明らかにする一方、讃嘆する神々の

身振りや梵天・帝釈天をはじめとするバラモン教の神々が仏伝美術において重大な役割を果たしていること、さらにはクリシュナ神話と類似していることなど、インド文化の土壌がその背景にあることを主張する。こうした図像や神話の受容によって釈迦の偉大さが強調され、太子時代の釈迦のイメージが作り上げられたと推測している。

また、〈仏伝経典との関係〉の視点からは、ガンダーラの「一代記的仏伝表現」は場面の選択や図像の細部において、釈迦の生涯にわたる『ブッダチャリタ』や『僧伽羅刹所集経』などの仏伝経典とは一致せず、むしろ『ラリタヴィスタラ』『方广大莊嚴経』『仏本行集経』などとよく合致することを指摘する。現存の『ラリタヴィスタラ』の成立は一般に5世紀頃と考えられており、また上記漢訳経典も隋・唐代の翻訳であるが、ガンダーラの仏伝浮彫からみて、より早くにこれらの仏伝経典の原型が成立したことは十分に考えられる。その背景には、大乘仏教の仏陀観、菩薩思想の展開があったことが推測されるが、それらの解明は今後の課題であるという。

Ⅲ. 審査委員会の評価

本論文は、きわめて多量の作例が知られるガンダーラの仏伝浮彫について、釈迦の生涯を物語る「一代記的仏伝表現」に注目し、上枝氏自身の現地調査も踏まえた図像の分析・考察と、仏伝経典との照合・検討という二つの方法を用いて、この「一代記的仏伝表現」、なかでもとくに「誕生」と「競試武芸」の説話・図像を詳細に分析した意欲的な研究である。

ガンダーラの仏伝美術の研究は、上枝氏も指摘するように、A.フーシェによってその基礎が築かれ、その骨子は現在も有効である。フーシェはパーリ経典（主に『ニダーナ・カタール』）と『ラリタヴィスタラ』『マハーヴァストゥ』『ディヴィヤ・アヴァダーナ』の梵本を主に用いて解釈し、場面の同定、解釈に成功した。その後の研究によってフーシェの解釈が修正され、またそれまで知られていなかった場面が新たに同定され、図像の細部がさらに解釈されてきた。

こうした研究状況の中で、上枝氏は当初はストーパーパを装飾していたセットとしての仏伝浮彫に着目し、その配列と場面選択を詳細に検討し、「一代記的仏伝表現」の様相を実証的に分析しており、この点は高く評価しうる。とくにサイドゥ・シャリフ I 主塔の仏伝浮彫について、その発掘報告書や論文を丹念に検討して仏伝表現の視点からその様相を考察したことは、着実な研究成果といえる。それを基にして、他の小塔の10例に及ぶ仏伝浮彫を精緻に分析することによって、ガンダーラにおいて「釈迦の生涯」としての仏伝美術が成立したこ

とを明示し、さらにその具体相を解明しており、このこともまた大きな成果といえる。

「誕生」（「灌水」を含む）と「競試武芸」の図像研究では、先行研究に依拠してギリシャ・ローマの図像が受容されているというが、それだけでなく、とくにインド古代初期美術の図像が取り入れられていること、また梵天・帝釈天などのバラモン教の神々の受容やクリシュナ伝説との類似を指摘し、ガンダーラの仏伝美術におけるインド文化の土壌、役割を主張している。この主張は全面的に説得力をもつとはいえないが、これまで看過されてきた興味深い視点であり、今後の研究に示唆を与えるものである。

仏伝図像と仏伝文献との照合・解釈は、本論文において大きな比重を占め、詳細な検討がなされている。しかし、文献が多岐にわたるだけにその考察は込み入ったものとなり、しばしば論旨が不明瞭になっていることは否めない。とはいえ、欧米の研究者がパーリ・梵本の経典を主に用いて解釈するのに対し、上枝氏が漢訳経典も含めて幅広く仏伝文献を扱っている点は評価し得る。「レスリング」の場面にみられる「水を注がれる敗者の図像」に関する記述が『太子瑞応本起経』と『修行本起経』の初期漢訳経典にのみみられることを指摘した点も卓見である。また、ガンダーラの「一代記的仏伝表現」は、『ブッダチャリタ』や『僧伽羅刹所集経』などの仏陀の生涯を説く仏伝経典とは図像が一致せず、むしろ『ラリタヴィスタラ』『方広大莊嚴経』『仏本行集経』などによく合致するという結論は説得力をもつ。

本論文は、ガンダーラの仏伝美術についての統合的な研究として評価されるが、なぜガンダーラにおいて「釈迦の生涯」としての仏伝美術が成立したのか、「一代記的仏伝表現」においてなぜ「教化サイクル」の場面が抜け落ちるのか、といった根本的な問いに対する解答は、仏伝文献の生成の問題とともに今後の課題として残されている。

問題点も少なくない。上述したように、とくに仏伝文献については、論述が十分に整理されておらず、このため論点がやや不明確になっている箇所がみられることが惜まれる。また、先行研究を尊重する余り、上枝氏の論証が十分に尽くされているにも拘わらず、自身の論点・主張がいささか曖昧になる傾向があり、より踏み込んだ明確な議論が望ましい。とはいえ、これらの問題点は、上枝氏の呈示した新たな見解を決して損なうものではなく、今後の改善に期したい。

本論文は、ガンダーラの仏伝美術研究を着実に一歩進めたものとして高く評価でき、今後とも残された課題を解明し、研究を深化、進展させることが十分に期待できる。

以上、審査の結果、本審査委員会は、上枝いつみ氏が龍谷大学学位規程第3条第3項に基づき、博士（文学）の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2014（平成26）年7月16日

主査：都築 晶子

副査：近藤 真美

副査：宮治 昭

副査：佐藤 智水